

Plant Morphologyのリニューアル ～日本植物形態学会の一層の発展を願って～

2004年-2007年度 編集委員長 鮫島 正純
(NPO法人総合画像研究支援会員)

日本植物形態学会設立集会の折り、黒岩先生が確か、とりあえずは10年を目指しましょうと決意表明されたことを思い出します。10年どころか30年を超え、感無量です。設立後、10数年を経るうちに、日本植物学会の前日開催という運営形態ゆえに、サテライトミーティング的な気分がもたらされ始め、それではいけない、“ちゃんとした学会”へ成熟させようとする機運が高まったと記憶しています。そして2005年に当時の第6代河野重行会長から形態学会将来計画WGへ諮問があり、翌2006年に最終報告(資料1)が答申され、そこでは、学会誌Plant Morphologyにもふれています。

時期は少しさかのぼりますが、2004年だったと思います、河野会長から学会誌の編集を担当するように依頼されました。私はその前年に、東京都臨床医学総合研究所(現東京都医学総合研究所)から弘前大学農学生命科学部に転出したばかりでまだまだてんてこ舞いしている最中でしたが、上述した“機運の高まり”に乗せられて、お引き受けいたしました。幸い、宮沢豊先生(現山形大)が当時すでに東北大に、また弘前大には着任されたばかりでしたが福沢雅志先生がおられたので、私を含めた3人で編集委員会を立ち上げました。

この編集委員会では2点の課題を設定し、そのうち学会誌の体裁の問題を最優先としました。それまでは、1頁1段組であったため、立派な内容の論文が、見た目はいわばレポート的な体裁であることから、会員から改善の要望が出ていました。この改善は“ちゃんとした学会”へ成熟するために必須な過程でした。宮沢先生の記憶と記録では、当時の投稿規定では、「・・・タイプライターやワードプロセッサを使用したものに限る」という文言があり、さらに送られてきた最終稿をダイレクトに印刷していたので、論文によってフォント(特に欧文フォント)や1頁の行数がバラバラだったという問題点もありました。1巻が発行された1989年にはまだパソコンが普及しておらず、さらに、なるべく経費をかけずに学会誌を発行せざるを得ない状況では、致し方のないことでした。

しかしその後のワープロソフトの進歩により、2005年当時はすでに、だれでも自在にページ割り付けができる環境にありました。そこで、学術論文の体裁である、1頁2段組にリニューアルすることにしました。さらに、編集委員の負担軽減も兼ねて、会員自ら1頁2段組の体裁で投稿していただくように変更いたしました。そのためのフォーマットを宮沢先生と福沢先生に作成していただき、投稿者はそれに上書きするだけで原稿ができあがるように準備いたしました。

16巻と17巻はいずれも弘前で印刷しましたが、前者は従来の体裁を単に引き継いだものですが、後者は翌年リニューアルした体裁で印刷しました。植物形態学会HPで、学会誌、そしてJ-STAGEへと進んでいただき、16巻と17巻の論文のPDFを開いて比較していただければ、その違いがおわかり頂けるでしょう。これによりレポート的論文から科学論文への転換ができました。

また、もう一つの問題は、雑誌の奥付に記載された発行年と実際の発行年が乖離しており、実際の発行が大幅に遅れていたことです。それを解消するために、実際は毎年発行し続けたのですが、奥付の発行年を1年スキップし、さらに19、18巻を合併号にして帳尻を合わせました。J-STAGEの巻号一覧をご覧になると、それがわかります。

その後の編集委員会・委員長のご努力の結果、投稿原稿作成方法が簡便化され、より投稿しやすく、よりよい学会誌となっております。ただ一つ残念なことは、その当時から現在も、オリジナル論文の投稿が多くない点です。研究は論文にすることにより初めて時代を超えて人類の“智”として残ります。どんな些細なことでも後世に残しておくことが科学者の責務です。学生会員の方々も、是非活用して下さい。

(資料1)

形態学会将来計画WG最終報告

2006年9月13日

文責：峰雪芳宣

メンバー：峰雪芳宣（兵庫県立大）、鮫島正純（弘前大）、坂口修一（奈良女大）、
塚谷裕一（東大）、東山哲也（東大）、泉好弘（大分大）、長里千香子（北大）

<議論内容まとめ>

会長から依頼のあったA~Dのテーマに、WGメンバーから提案のあったテーマEを加えて、メールで議論し、2005年度の大会で、中間報告を出した。2005年度大会の晩、河野会長、田中庶務幹事を加えて、一同に会して議論した。その後、メールで議論し、最終報告を仕上げた。特筆すべき点として、Webの有効利用が、どの目的にも必要であることで、意見が一致した。

議題

- A. 学会の独立について
- B. 学会の新たな目標について
- C. Plant Morphologyの編集と運営について
- D. 学生や若手研究者に入会を薦める方法
- E. 形態学会のWebのありかた

以下、上記のテーマごとに、報告する。

A. 学会の独立について

現段階では、植物学会から独立して大会等を行うことは難しいことでほぼ意見が一致した。ただ、将来どうか、また、学会の存在意義については、今後諸般の状況を考慮して判断することが必要と思われる。

B. 学会の新たな目標について

1. 学会の目標

植物形態学会が独自の発展をするには、植物学会や植物生理学会の様な大きな学会ではできない、植物形態に関する研究、教育などの情報の場になることが必要と思われる。

2. 具体的な提案

どうすれば形態学会を発展させることができるかという観点から議論を行い、今後行って価値のありそうな方策として下記の様な提案が出た。

(1) 以前のGFPシンポジウムのように、企画ものの簡単なシンポジウムを時々独立に行う。

(2) 植物形態学会の提案で開催しているシンポジウムを、植物学会のJPR symposiumの形で、「良い」総説集を組む。

JPR symposiumでは、それぞれの責任編集者の短い総括を載せることができるので、そこで形態学会としての位置づけをある程度明らかにできる。日本人だけで企画したJPR symposiumでも、例えば2001年については7回引用1人、6回引用1人、3回引用2人、1回引用2人と、JPRのインパクトファクター（昨年、1.224）から比較してかなりよく引用されている。2002年も7回引用2人、5回引用1人、4回引用1人、2回引用2人で、効果はかなりあると、前向きな意見が多かった。

（3）平瀬賞や奨励賞を受賞された方に、それ以降も積極的にポスター発表などに参加してもらう様呼びかける。

C. Plant Morphologyの編集と運営

1. Plant Morphologyの位置づけ

形態を主体にした雑誌が少ない状況で、“印刷物にする”ことの利点（priorityの確保）と会員への情報伝達および会員相互の情報交換を目的として発行されてきた。しかし一方では、発行に費やす労力と会費にふさわしいものであるためには、会員以外のなるべく多くの研究者に読まれるように状況を変える努力も必要である。

2. Plant Morphologyの現状

上記の観点に立って編集委員会で、掲載論文を従来の一段組みから二段組に変更し、前号から論文として一般的に認知される体裁が実現した。また、会員相互のテクニカル情報交換向けのテクニカルチップス欄を設けた。原稿の中身は、三賞受賞者関係と大会要旨が主体であるが、各巻1-2編の投稿もある。

発行体制は、固定した編集部は置かず、“適当な”会員に会長が依頼して編集委員会を組織しているのが現状で、担当した会員には労力負担などの問題があるが、小さい学会で年1回発行の現状ではこの体制を続けざるを得ないと思われる。

3. Plant Morphologyの今後

投稿原稿の確保とサーキュレーションの拡大が大事である。

現状ではサーキュレーションは会員に限定されているが、今回の段組変更により外部へのサーキュレートに耐えうる体裁となった。そこで、学会通信や事務的なものはHPに移し（一部すでに始まっている）、Plant Morphology誌の中身をPDF化してWebページで無料公開するのが良いという結論になった。

冊子体を残すか残さないかは、ひとえに、ちゃんとした別刷がほしいか、あるいは自分でプリントアウトしたものでよい、のどちらをとるかによるが、和文総説は別刷の配布など、研究内容の宣伝に便利な長所もある。また、現状では冊子体の廃止が経費削減には直接つながらない（編集長のコメント）様であるが、工夫によりPlant Morphology関連予算をプラス収支に持っていくことも可能との意見も出た。

（参考意見）どのようにして冊子体の廃止により収支状況をプラス側に転じていくか。（10万から20万のできるだけ安い金額で、Word等で投稿された原稿をPDF版に仕上げるようなサービスを行っているところがあれば、Plant Morphologyの製作にかかる総額が激減する。著者には編集料とPDF版を自由に配れる権利ということで、必要な分をお支払いいただくことにすれば、これまでの別刷り代よりもだいぶ安くすむと思われる。そうすれば、収支状況がプラス側に転じるように思います。もしそうなれば、浮いた分は、ホームページをプロにデザインしてもらうなどの $+\alpha$ の部分に回すことができる）

また、Plant Morphologyの内容については、以下の意見が出た。

- （1）HPの英語版もあると、海外からも覗いてもらえる。また、英文のオリジナル論文をある程度の数掲載できれば、さらに増えるで。そのためにはどうするかが問題。
- （2）底辺の拡大を目標に、Plant Morphologyの内容にセミナー的な内容のものも加える。

D. 学生や若手研究者に入会を薦める方法

3賞やポスター賞の宣伝をし、これらの賞に応募することをきっかけに、形態学会に入ってもらい（興味を持ってもらう）のも一つの方法である。また、大会に参加すると、植物学会などではできない深い議論ができるなどのメリットがあることを宣伝するなど、この学会に参加すれば、自分の知りたい植物形態に関する情報が得られると思ってもらえる様な場にするのが重要。

E. 形態学会のWebのありかた

Webの重要性は、全員認識しており、昨年度の中間報告での意見が取り入れられHP委員会が立ち上がっている。以下に、公開する項目として現状のWebページにプラスする可能性のあるものを5つ挙げ、問題点などについて説明する。

1. Plant Morphology の内容の pdf ファイル
2. 植物形態関係の画像、ムービーファイルのライブラリー
3. 植物形態学関連サイト（会員個人サイト含む）へのリンク集
4. 一般向け教育ページ（用語解説集、Q&A など）
5. 学会の目的、概要を記したページ（会長挨拶など）

1はあまり大きな問題もなく実現できると考えられる。ただ、海外の研究者のアクセスを考えるとWebページに英語版が必要になる。

2に関しては、具体的にどのようにして素材を収集するかの問題がある。会員（とくにシニアの会員）の協力をどの程度上げるか、その体制づくりが鍵となる。また、ファイルの整理やアノテーション、webページ作製の手間もかなりのものと予想される。大変だが、この事業は文化的に価値のあるやりがいのある事業だと思う。本格的なものをめざすとなれば、学会内に“画像データベース”委員会みたいなものを立ち上げたり、なんらかの資金獲得が必要である。

3は、リンクを張る先（とくに形態学会会員のサイトなど本学会ならではのサイト）を十分確保する必要があるが、知りたい項目別（材料別など）にリンクを整理しつつ、現状のリンクページ（今は植物学会へのリンクだけ）を拡充する方向で実現をめざせる。

4は、学会の規模を考えると手間がかかりすぎるのではないかとの意見があるが、植物形態学に興味をもってくれる人の裾野を広げる意味では大切である。

5は、とくに問題なくできる。

以上の項目のほか、こうした事業を行う上で、会員相互が情報交換をおこなえるメーリングリストが運営できるとよい（＝6. 会員メーリングリストの構築）。現在のインターネットの普及状況を考えるとリタイアしたシニア会員を含め結構参加してもらえるのではないかと思える。サーバーの管理や個人情報の管理などややこしい問題があるが、検討に値すると思われる。

以上、項目を羅列しましたが、実際には限られた人的資源、資金内であることなので、その効果を考えつつ優先順位をつける必要がある。一案としては、1, 3, 5はただちに実現に向け作業を開始し、2, 4, 6（メーリングリスト）はとりあえず要検討にする。とくに2と4を一度に両方するのはおそらく無理と思われる。4は植物生理学会（Q&A コーナー）や植物学会（用

語集)の活動と重複したり反対意見があるので、その意味では2の方が先に手がけるのが良いと思われる。しかし、2も本格的なライブラリーをめざせば一大事業になり、逆に中途半端なものでは役に立たない気もするので、大変さは2以上の可能性がある。6を立ち上げて広く会員の協力を得つつ、2か4のどちらかを実行するようなことができるのが理想？

(資料1)

形態学会将来計画WG最終報告

2006年9月13日

文責：峰雪芳宣

メンバー：峰雪芳宣（兵庫県立大）、鮫島正純（弘前大）、坂口修一（奈良女大）、
塚谷裕一（東大）、東山哲也（東大）、泉好弘（大分大）、長里千香子（北大）

<議論内容まとめ>

会長から依頼のあったA~Dのテーマに、WGメンバーから提案のあったテーマEを加えて、メールで議論し、2005年度の大会で、中間報告を出した。2005年度大会の晩、河野会長、田中庶務幹事を加えて、一同に会して議論した。その後、メールで議論し、最終報告を仕上げた。特筆すべき点として、Webの有効利用が、どの目的にも必要であることで、意見が一致した。

議題

- A. 学会の独立について
- B. 学会の新たな目標について
- C. Plant Morphologyの編集と運営について
- D. 学生や若手研究者に入会を薦める方法
- E. 形態学会のWebのありかた

以下、上記のテーマごとに、報告する。

A. 学会の独立について

現段階では、植物学会から独立して大会等を行うことは難しいことでほぼ意見が一致した。ただ、将来どうか、また、学会の存在意義については、今後諸般の状況を考慮して判断することが必要と思われる。

B. 学会の新たな目標について

1. 学会の目標

植物形態学会が独自の発展をするには、植物学会や植物生理学会の様な大きな学会ではできない、植物形態に関する研究、教育などの情報の場になることが必要と思われる。

2. 具体的な提案

どうすれば形態学会を発展させることができるかと言う観点から議論を行い、今後行って価値のありそうな方策として下記の様な提案が出た。

(1) 以前のGFPシンポジウムのように、企画ものの簡単なシンポジウムを時々独立に行う。

(2) 植物形態学会の提案で開催しているシンポジウムを、植物学会のJPR symposiumの形で、「良い」総説集を組む。

JPR symposiumでは、それぞれの責任編集者の短い総括を載せることができるので、そこで形態学会としての位置づけをある程度明らかにできる。日本人だけで企画したJPR symposiumでも、例えば2001年については7回引用1人、6回引用1人、3回引用2人、1回引用2人と、JPRのインパクトファクター（昨年、1.224）から比較してかなりよく引用されている。2002年も7回引用2人、5回引用1人、4回引用1人、2回引用2人で、効果はかなりあると、前向きな意見が多かった。

（3）平瀬賞や奨励賞を受賞された方に、それ以降も積極的にポスター発表などに参加してもらう様呼びかける。

C. Plant Morphologyの編集と運営

1. Plant Morphologyの位置づけ

形態を主体にした雑誌が少ない状況で、“印刷物にする”ことの利点（priorityの確保）と会員への情報伝達および会員相互の情報交換を目的として発行されてきた。しかし一方では、発行に費やす労力と会費にふさわしいものであるためには、会員以外のなるべく多くの研究者に読まれるように状況を変える努力も必要である。

2. Plant Morphologyの現状

上記の観点に立って編集委員会で、掲載論文を従来の一段組みから二段組に変更し、前号から論文として一般的に認知されうる体裁が実現した。また、会員相互のテクニカル情報交換向けのテクニカルチップス欄を設けた。原稿の中身は、三賞受賞者関係と大会要旨が主体であるが、各巻1-2編の投稿もある。

発行体制は、固定した編集部は置かず、“適当な”会員に会長が依頼して編集委員会を組織しているのが現状で、担当した会員には労力負担などの問題があるが、小さい学会で年1回発行の現状ではこの体制を続けざるを得ないと思われる。

3. Plant Morphologyの今後

投稿原稿の確保とサーキュレーションの拡大が大事である。

現状ではサーキュレーションは会員に限定されているが、今回の段組変更により外部へのサーキュレートに耐えうる体裁となった。そこで、学会通信や事務的なものはHPに移し（一部すでに始まっている）、Plant Morphology誌の中身をPDF化してWebページで無料公開するのが良いという結論になった。

冊子体を残すか残さないかは、ひとえに、ちゃんとした別刷がほしいか、あるいは自分でプリントアウトしたものでよい、のどちらをとるかによるが、和文総説は別刷の配布など、研究内容の宣伝に便利な長所もある。また、現状では冊子体の廃止が経費削減には直接つながらない（編集長のコメント）様であるが、工夫によりPlant Morphology関連予算をプラス収支に持っていくことも可能との意見も出た。

（参考意見）どのようにして冊子体の廃止により収支状況をプラス側に転じていくか。（10万から20万のできるだけ安い金額で、Word等で投稿された原稿をPDF版に仕上げるようなサービスを行っているところがあれば、Plant Morphologyの製作にかかる総額が激減する。著者には編集料とPDF版を自由に配れる権利ということで、必要な分をお支払いいただくことにすれば、これまでの別刷り代よりもだいぶ安くすむと思われる。そうすれば、収支状況がプラス側に転じるように思います。もしそうなれば、浮いた分は、ホームページをプロにデザインしてもらうなどの $+\alpha$ の部分に回すことができる）

また、Plant Morphologyの内容については、以下の意見が出た。

- （1）HPの英語版もあると、海外からも覗いてもらえる。また、英文のオリジナル論文をある程度の数掲載できれば、さらに増える。そのためにはどうするかが問題。
- （2）底辺の拡大を目標に、Plant Morphologyの内容にセミナー的な内容のものも加える。

D. 学生や若手研究者に入会を薦める方法

3賞やポスター賞の宣伝をし、これらの賞に応募することをきっかけに、形態学会に入ってもらい（興味を持ってもらう）のも一つの方法である。また、大会に参加すると、植物学会などではできない深い議論ができるなどのメリットがあることを宣伝するなど、この学会に参加すれば、自分の知りたい植物形態に関する情報が得られると思ってもらえる様な場にするのが重要。

E. 形態学会のWebのありかた

Webの重要性は、全員認識しており、昨年度の中間報告での意見が取り入れられHP委員会が立ち上がっている。以下に、公開する項目として現状のWebページにプラスする可能性のあるものを5つ挙げ、問題点などについて説明する。

1. Plant Morphology の内容の pdf ファイル
2. 植物形態関係の画像、ムービーファイルのライブラリー
3. 植物形態学関連サイト（会員個人サイト含む）へのリンク集
4. 一般向け教育ページ（用語解説集、Q&A など）
5. 学会の目的、概要を記したページ（会長挨拶など）

1はあまり大きな問題もなく実現できると考えられる。ただ、海外の研究者のアクセスを考えるとWebページに英語版が必要になる。

2に関しては、具体的にどのようにして素材を収集するかの問題がある。会員（とくにシニアの会員）の協力をどの程度仰げるか、その体制づくりが鍵となる。また、ファイルの整理やアノテーション、webページ作製の手間もかなりのものと予想される。大変だが、この事業は文化的に価値のあるやりがいのある事業だと思う。本格的なものをめざすとなれば、学会内に“画像データベース”委員会みたいなものを立ち上げたり、なんらかの資金獲得が必要である。

3は、リンクを張る先（とくに形態学会会員のサイトなど本学会ならではのサイト）を十分確保する必要があるが、知りたい項目別（材料別など）にリンクを整理しつつ、現状のリンクページ（今は植物学会へのリンクだけ）を拡充する方向で実現をめざせる。

4は、学会の規模を考えると手間がかかりすぎるのではないかとの意見があるが、植物形態学に興味をもってくれる人の裾野を広げる意味では大切である。

5は、とくに問題なくできる。

以上の項目のほか、こうした事業を行う上で、会員相互が情報交換をおこなえるメーリングリストが運営できるとよい（＝6. 会員メーリングリストの構築）。現在のインターネットの普及状況を考えるとリタイアしたシニア会員を含め結構参加してもらえるのではないかと思える。サーバーの管理や個人情報の管理などややこしい問題があるが、検討に値すると思われる。

以上、項目を羅列しましたが、実際には限られた人的資源、資金内であることなので、その効果を考えつつ優先順位をつける必要がある。一案としては、1, 3, 5はただちに実現に向け作業を開始し、2, 4, 6（メーリングリスト）はとりあえず要検討にする。とくに2と4を一度に両方するのはおそらく無理と思われる。4は植物生理学会（Q&A コーナー）や植物学会（用

語集)の活動と重複したり反対意見があるので、その意味では2の方が先に手がけるのが良いと思われる。しかし、2も本格的なライブラリーをめざせば一大事業になり、逆に中途半端なものでは役に立たない気もするので、大変さは2以上の可能性がある。6を立ち上げて広く会員の協力を得つつ、2か4のどちらかを実行するようなことができるのが理想？